《研究ノート》

北垣晋太郎の幕末

高　久　嶺之介

本稿は，第三代京都府知事北垣国道（幼名晋太郎）が幕末20代の時にかかわった文久3年（1863）10月の生野の変でどのように行動をしたかをあらためて検証しようとするものである。もちろん生野の変の北垣の行動は不明な点がある。しかし，明治期の彼の回想録など諸史料と生野の変当時の彼の行動を分析すれば，迷いがあったとしても決起中止の流れに身を置いていたことは間違いない。さらに北垣の生家跡にある祠の「祭神」をみれば，北垣が生野の変においてどういう人びとに依拠しようしていたかを知ることができる。

また，慶応元年（1865）の頃と思われるが，北垣が長州に潜伏し，奇兵隊に幕府の間諜と怪しまれ，処刑されんとした時，長州藩士で画家の森寛斎に命を助けられたという逸話がある。この逸話と明治以後の両者の交流の模様を明らかにする。

は　じ　め　に

第三代京都府知事北垣国道については，本誌第48巻4号（通巻120号）で「北垣国道と鳥取人脈」と題して，彼の生涯を彩る「鳥取人脈」という側面に焦点をあて，その逝去までを分析した。[1] しかし，但馬能座村の一農民であった北垣晋太郎（北垣の幼名）が世に出るきっかけになる生野の変の過程については，紙数の関係により，まったく触れることができなかった。したがって本稿では，生野の変の過程を北垣の動きを中心に分析する。そこでの主眼は，北垣が迷いながらも決起中止の流れに身を置いていた事実である。ただし，生野の変の全過程はかなりの作業であり，本稿では，あくまで北垣とのかかわりで生野の変を扱うことになる。

さらに本稿では付随的に生野の変後長州に入った北垣と画家である長州の森寛斎の関係，すなわち北垣が森寛斎によって命をたすけられたいうことが伝えられている。この事実と明治以後の両者の関係を，断片的な史料をもとにみていきたい。

本稿執筆にあたって戦前における名著である沢宣一・望月茂『生野義挙と其同志』（1932

年刊，東京堂）が使用した史料をできる限り収集しようとした。ただし，今日見ることができない史料もあり，その点は『生野義挙と其同志』および太田虎一『生野義挙日記』（1941年12月，生野町教育委員会，1993年10月復刻）で補わざるを得なかった。また，史料では，北垣の講演録（「但馬一挙の真相」）も使用したが，ほかに戦後の文献や自治体史も利用した。また，生野の変については，前掲書以外に，前嶋雅光『幕末生野義挙の研究　但馬草莽の社会経済的背景』（明石書店，1992年），高木俊輔『明治維新草莽運動史』（勁草書房，1994年）の「第二篇第一部　文久・元治期の尊王攘夷運動」などがあり，兵庫県の自治体史もおおむね触れている。また，平野国臣の伝記である平野國臣顕彰会編『平野國臣伝記及遺稿』（博聞社書店，1916年，〔復刻版〕象山社，1980年），春山育次郎『平野國臣傳』（平凡社，1928年）は『生野義挙と其同志』より刊行が早い出版物であるが，これも利用した。もちろん，本稿はあくまで北垣国道論が目的であり，生野の変の全過程を明らかにすることを目的にしていない。北垣晋太郎については，もともと研究は少ないが，高階一一『嗚呼榧の木さん國道さん』（養父町教育委員会，1986年）が幕末時を詳しく描写している。[2)]

なお，こういうテーマの必要上，筆者は生野の変の現場である現兵庫県朝来市を中心に宍粟（しそう）郡に手をひろげ，現地を見学した。その成果の一部は本稿に反映されている。

1　生野の変を北垣・原はどう見ていたか

『塵海』によると，北垣国道は1891年（明治24）7月19日，日曜に家を訪ねてきた但馬出身の書生に次のようなことを述べている。

> 但馬書生結城勘右衛門来ル。但馬一挙野史編纂之事ヲ告ケ其指揮ヲ乞ウ。由テ野史ノ材料其実ヲ得カタク，多ク想像的ニ誤ルノ理由ヲ示ス。[3)]

北垣は，明治中期になって維新の回顧が進む中，生野の変を英雄的あるいは劇的に見ることを戒めたように見える。

北垣は，1912年（明治45）3月11日，維新史料編纂会で，「但馬一挙の真相」と題して講演した[4)]。彼は，天保7年（1836）8月27日生まれであるから，この明治末年の時点で，満75歳の時である。北垣は，1916年（大正5）1月16日，京都市上京区の寓居で79歳の生涯を閉じるから，講演の時期は最晩年の頃である。彼は好き好んでこの講演を引き受けたかどうか。

1911年（明治44）5月10日，北垣は宮内省より維新資料編纂会委員を仰せつけられて

いた[5]。おそらく，維新資料編纂委員であったことが講演をおこなった理由であろう。さらに，この講演には井上馨が聴衆にいる。この講演時，文久3年（1863）10月時の生野の変に参加した人間で生存しているのは，主立った人物では北垣国道および原六郎（進藤俊三郎）の2人，そのほかに旧肥後藩士木曽源太郎（旭建），旧水戸藩士前木鈷次郎しかいなかったと思われる。[6] しかも生野の変の「瓦解」（北垣国道の表現）時原六郎は，京都から因州（鳥取）にいて，軍需品調達のため奔走しており，生野の変「瓦解」の現場にはいなかった。いわば，この明治末の時点で，生野の変の「瓦解」を知るものは北垣と木曽・前木しかいなかったと思われる。

この講演には，2つのことを指摘することができる。第1に北垣の講演は，登場人物について，現役を引退したとはいえ政治に関係していたことからおおむね評価をくだすことには慎重であったようである。この講演の聴取者として井上馨が参加していたこともあるのだろう。この点では，同じように長生きしながら，原六郎（進藤俊三郎）が，後述するように野村靖（和作）に対する感情を率直に表明しているように見えることなどとは対照的である。第2に，生野の変の「瓦解」前後，すなわち文久3年（1863）10月11日から13日前後の記述については，『生野義挙と其同志』が疑問を呈しているように，北垣の動向には不明な点が多い（後述）。

この「生野の変」について，北垣は講演の末尾で，一貫して「戦争」というほどの組織だったものではなく，結果は「まったく瓦解」のようなものであったと強く強調している。

> もう此処になると戦争でも何でもありませぬ。南（八郎―高久）の人数というものは皆腹を切つてしまつた。これで但馬の一挙なるものは，まるで瓦解をしたのであります。これが大変世間に言触して居る所とは違います。世間に言触しているのは戦争をしたやうに書いてありますけれども，戦争はしませなんだ，まったく瓦解であります。
>
> （中略）先づ概略申上げまするとと斯ういふやうな次第であります。立派な仕事といふものは一もありませぬ。唯此中で翌年の元治甲子に長州の兵が上京しました時（禁門の変―高久）に際して，本多素行，横田友次郎，平野次郎（国臣―高久），黒田与一（郎），是等の者は京都の牢屋で殺されました。（中略）今まで生き残つて居ります者は，原六郎と私二人だけでございます。其他の人は皆死にました。[7]

このように，北垣の話は最後はペシミステックな感慨に満ちている。むしろ英雄的要素を排除しようとしたと言っていい。また，その一方他に対して，批判的言辞が割合少

ないのが特徴である。

では，原六郎（進藤俊三郎）はどうか。ただし，原は武器調達のため京都にいて生野の変の現場には参加していない。原自身は，1913年（大正2）4月20日，「生野銀山の義挙」と題して，但馬会で講演している[8]。この時原自身も，「唯あゝ云ふことを企て，其結果の甚だ拙かつたこと，大失敗に終わってしまったことは，今日では云ふまでもなくその当時でさへ辻褄の合わぬ様な思ひもし，又世間でもさう思つた事であらう」[9]と生野の挙兵を失敗とする点では，北垣と同様であるが，次のようにより直截的に述べている。

> 抑も銀山の一挙が斯ういう始末に終わつたというのは甚だ遺憾であつた。今申したように但馬は昔から勤皇の歴史があつたのである。併し但馬に農兵を組織すると云ふことはどうしても幕府の手を借らなければならないので，其当時川上猪太郎と云ふ代官があつたのを，北垣氏が山岡鉄舟などと共に段々手を尽くして之を説きつけ，とうとう許された。北垣氏は最も奔走尽力した一人である。実は其農兵を以て義挙をなす積りであつた所が，事が齟齬して農兵が成立せぬうちに銀山の一挙が実行されて遂に敗れてしまつた。それは只今述べた通りで極く簡単である。其挙兵の方も敗滅の方も共に軽卒であつた。元々大和五条の義挙を応援する積りで起こつたのであるから，五条が破れた後に如何とも致方がなかったのである。[10]（傍線筆者）

このように，北垣および原がともに生野の変を，まったくの「大失敗」とすることは共通の認識である。

2　生野の変の前段階

まず，生野の変がどういうものであったか，見ておこう。まず，幕末の時代状況がある。『城崎町史』が的確にいう。「草莽の臣との言葉がある。尊王の志士であって，将軍や大名に主従関係を持たぬ浪人とか民間のものという意味であり，無名の志士が国を憂いて出奔し，平凡な村役たる庄屋・年寄級も政治に関心を寄せ始める時代が到来した」[11]。

北垣晋太郎もそういう人物の一人として登場する。北垣は，前述したように天保7年（1836）8月27日に但馬国の庄屋北垣三郎左衛門，りきの長男として生まれた。北垣が生まれた能座村，さらに生野銀山および生野を中心とした村々は生野代官所の支配地（「幕領」）の中にあり，天保6年（1835）の管轄地は但馬国内では朝来郡・養父郡・出石郡・気多郡内の152か村・高3万4,506石であった。後述する中島太郎兵衛はこの地の大庄屋であり，ふだん生野代官所に出入りし，また同じく後述する元膳所藩士で僧となる本多

素行もこの地に「隠然たる勢力を扶植し」，生野代官所の地役人とも絶えず往来する関係であった。[12)]

北垣は7歳の時儒者池田草庵の立誠舎（八鹿村）に入塾し，弘化4年（1847）青谿書院（宿南村）になってからも引き続き在塾し，在塾20年におよんだ。しかし，文久3年（1863）尊王攘夷運動に身を投じ，池田草庵のもとを退塾した。この時進藤俊三郎（佐中村：原六郎），西村哲二郎（八鹿村：太田次郎）も行動を共にし退塾している。[13)]

そして，北垣は「文久二年に私は農兵を募つて，北海の防備に備へやうといふことを考へまして」，文久3年1月に京都に上り，親族の西村敬蔵に話をした。[14)]

もともと，但馬に農兵を起こすという企ては北垣の案であった。文久3年（1863）1月，北垣の最初の案は，反幕の要素がなかった。2月山岡鉄太郎との接触，そして山岡の手を経て農兵取立ての建白を幕閣に提出する。「私は幕府の百姓でありますから，どうしても農兵を募るにしても幕府の許可を受けんければ出来ませぬ」[15)] という，北垣の言がそれを物語る。それが，3月に城崎温泉において薩摩藩士美玉三平との接触，さらに7月2日，美玉，北垣が同道して攘夷戦争参加の目的をもって馬関（下関）に入る。この時のことを，「北垣男（爵）談話によると北垣が主であって，美玉が従になって居る。即ち北垣が美玉を帯同して長州に赴いたやうなことになつているゐるが，当時の身分並に年輩より察して，是れは恐らく主客顛倒であらうか」と『生野義挙と其同志』は言う。[16)] すでに，5月10日，長州藩は下関海峡通過の米商船を砲撃し，さらに5月23日仏艦，ついで26日オランダ艦を砲撃する。6月1日には米艦ワイオミング号が長州藩砲台を報復攻撃し，6月5日には仏艦2隻が砲台を砲撃し，占領する。馬関に行くという事情を北垣は，次のように回想する。

> 京都の同志の人が（中略），美玉三平は今君の所に潜伏して居つても，随分危険だ。あれは薩摩の四条の屋敷を抜けて出たもので，今随分追捕が掛つて居るから危い，丁度五月十日に下ノ関で攘夷を始めたから，其方に行つて働くが宜い。（中略）それに付ては私（北垣―高久）も同行したい。<u>但馬で農兵を心配してみた所が，百姓のことである，殊に年は若し（ママ），なかなか人に信用されず，容易のことでないから，馬関に行つて攘夷の先鋒に当つて，それで死んだら結構なり，生きて帰つたら幾分か吾々が信用されるに相違ない，一つ私も一緒に行きませうといふことを申しました</u>。それは大いに同志の賛成を得て，品川弥二郎の添書を貰つて，六月十八日に但馬の私の郷里を立ちまして馬関に参りました。（傍線筆者）[17)]

7月2日，馬関に着船した北垣と美玉は長州藩「御有志之御方々」に会い，「厚御厄介」

になるが，外国との「戦時」には遅れ，「深残念に存申候」という状態であった[18]。しかし，長州行きの経験は北垣に大きな刺激と転機になったと思われる。8月のいつかは不明であるが，その後郷里に帰った北垣は，長州の久坂玄瑞，寺島忠三郎にあてて，書を送り，農兵組織運動への尽力を要請した。その文章には，「抑私自国之体様，尤帝都の近国にして，且海岸を乍帯，嘗て防禦の備無御座候。既に朝廷攘夷之御期限御評決之趣承り候得共，未だ国中へ布告無之，当時の形勢にて，夷賊之難，忽に起り候得ば，一国の蒼生空しく手を束，三日を不待して為彼に被犯掠，一国醜夷の馬蹄となる事，鏡に懸て見る如く」と危機意識を訴えて「土着之兵隊を相立」ることの必要性を訴える。そして，この運動において，は，「其内親戚等は私共捨家奔走致，有志之士に交を乞候事抔甚怪しみ，幕府之威を憚り，遂に絶交骨髄に徹し，切歯鬱憂日を送り候内，御尊藩には馬関に於て清き御旗上被為在，攘夷御手始め相成候段，天下誰か感激不致哉」[19]と，幕府とは対照的に長州の行動を最大限持ち上げるまでに至っている。

この8月は，政局が目まぐるしく動いた月であった。8月13日，攘夷祈願・親政軍議の大和行幸の詔勅が出る。8月17日には大和五条で天誅組の変がおこる（27日には壊滅）。さらに8月18日，いわゆる八月十八日の政変により，朝議が一変し，国事参政・寄人の廃止，大和行幸の中止が発表され，翌日三条実美ら七卿ら長州へと逃れていく。

このような状況の中で，長州の尊王攘夷派の人びとにとっては，最大の課題は大和五条で決起した人びとを支援することに置かれていく。

9月1日，入洛した北垣は，長州屋敷を訪ねる。この時の北垣は，「当時晋太郎の意見としては，この際，全力を尽くして，訓練を施し兵勇を養ひ，機械器具を整へたならば，一年後には農兵は役に立つであろう。即ち徐ろに実力の完備を期して後，翌年の秋を待つて，隣国の諸有志と連絡を執つて事を挙げたならば，先づ五畿中国を動かすことが出来よう。<u>此機に臨んで長州の勢が大挙して，潮の如く押し寄せたならば</u>必ず多年の本願は成就するに違ひない，一方大和の義挙に対しては，一時楠木公赤坂退去の故智に倣ひ，暫く分散して，時機の到来を待つ事が策の得たものと考えへた。」[20]（傍線筆者）。しかし，長州屋敷にいた野村和作はこれに反対であった。

野村は，大和の「義挙」は，今日の形勢において一日も早く救けなければならぬ，機械・器具・人数の不足は，必要に応じて送るので，（但馬に行くことを―高久）思い立ってほしい，このために平野次郎（国臣）を但馬に派遣したのだ，君（北垣）も急行して但馬に帰って，平野等を助けて大和の応援を謀れというものであった。それに対する北垣の対応はこうである。

晋太郎思ヒケラク，根本ノ農兵其物ハ未ダ取立テノ許可ヲ得タバカリデ，訓練モ行届イテ居ナイ，従ツテ戦争ニ必要ノ武器弾薬ノ用意モ無イ，コノ烏合ニ等シイ衆ヲ提ゲテ事ヲ起サウト云ウコトハ，何人ニシテモ引受ケラレルモノデハナイ。貴君ハ但馬ノ実情ニ対シテ御承知ナイカラ困ル，貴君モ序ニ但馬ニ入ツテ，実状ヲ視察シタ後，事ヲ起コストモ起コサナイトモ決定セラレタイト重ネテ云ツタ。[21]（傍線筆者）

この出典は北垣の「但馬一挙ノ真相」であるが，実際『維新史料編纂会講演会速記録　一』（「但馬一挙の真相」が収録）で述べている内容とは次のように微妙に異なる。

私は尚其得失を判断することが出来ませなんだ。なぜならば但馬は農民ばかりで，まだまだ是から二千の兵を一年の間に拵えやうといふのでありますけれども，今は何もない，だからどうも野村の論にそれなら宜しい，請合ひましたといふことは云えませぬから，それで野村にどうか但馬に行つて其実況を見て下さい，其上で決して貰ひたい，今彼所へ打ち込んで見た所がどうすることも出来ないから―といふことを野村に談じて別れました。[22]

内容はほぼ同一のようであるが，前者では，北垣の不満がより直截である。「貴君ハ但馬ノ実情ニ対シテ御承知ナイカラ困ル」などという言葉は後者にはまったくないのである。いずれにしても『生野義挙と其同志』では，「北垣の言葉には幾分気乗りのしない調子が見える」[23] と書いてあるように，短時日での農民組織化の難しさを認識していたからであろう。のちに，そのことが現実化する。

野村は，その後因州藩の松田正人（道之）の同意を取り付け，野村自身が京都を離れられないため，北垣の同行人として芸州藩の田中軍太郎[24] を但馬へ出発させている。

北垣が，但馬に進んでいたころ，さきに但馬に入っていた平野国臣，美玉三平，本多素行らは，会議の準備を進めていた。9 月 13 日北垣が但馬に着し，竹田町（現兵庫県朝来市和田山町竹田）太田六衛門方に着いた。9 月 19 日，高田村（現兵庫県赤穂郡上郡町）中島太郎兵衛方にて，農兵募集の会議が開かれ，地役人退出の後，秘密会議が開かれ，三田尻亡命の七卿，できうれば三条実美を総裁として仰ぐため平野国臣と北垣晋太郎を長州に派遣すること等を決める[25]。これに基づき，平野・北垣は 9 月 28 日三田尻（現山口県防府市三田尻）に入り，様々な周旋の結果，長州藩の「慎重な態度」にもかかわらず，個人として，10 月 2 日，公卿の沢宜嘉，随行者として長州藩から長州奇兵隊総督河上弥市（南八郎）（9 月 12 日就任）ほか 9 名，筑前藩から平野国臣ほか 3 名，水戸藩から川又左一郎ほか 3 名，出石藩から多田弥太郎と高橋甲太郎，戸原卯橘（秋月藩），田岡俊三郎（小松藩），森源蔵（阿洲），江上秀胤（三牧謙介，尾州），永田左衛門（不明），加えて北

垣晋太郎（但馬），合計27名が三田尻を船で但馬に向けて出発した。[26] 長州奇兵隊総督河上弥市が南八郎と名を変え（北垣は「但馬一挙の真相」の中では「此処で一挙を起こす時には南八郎といふ名になつて居ります」[27] という），10名の奇兵隊員とともに但馬行に加わった背景には相当な決意があったと考えられる。

しかし，先発した北垣が10月7日，飾磨に上陸し，新町（現兵庫県神崎郡福崎町）で偶然進藤俊三郎（原六郎）に会い大和が破陣したことを告げられる。そして，①大坂の長州藩士がすべて国に帰ったこと，②今但馬に事を挙げたところで事はならない，③そこで野村和作と松田正人（因州藩）が相談し，沢卿の但馬行を阻止，沢卿は因州に潜行して，因州に御留りになるがよい，その他は皆大阪の長州邸に潜伏して時機を待つがよい，と告げられる。なにより，大和の破陣は但馬での決起の目的をほとんど意味のないものにし，大阪の長州藩士が国に帰ったことは，期待した軍事力がほとんど使用不能になり，要するに但馬での決起をほとんど不可能にした。[28] そしてそれは以前野村和作から聞いていたこととはまったく違う事態であった。北垣の書いたものには，野村への批判はないが，原六郎（進藤俊三郎）の維新編纂委員会席上での講演にはある。

> さうして居る処に北垣がやつて来た。私（進藤俊三郎―高久）の顔を見てビックリして『どうしたのだ』と云う。私は委しく事情を述べたところが，大に失望して，それだから俺は野村に駄目をおしたのだ，第一我々の農兵と云うものが，まだ出来ておらぬ。なんで義挙をやるかと云つたら，これ々々の人数が大阪にゐるからと云つた。それに大和がやりかけてゐるからと云つた。
>
> 兎に角，こゝで三人（北垣・進藤・本多素行―高久）は是が非でも延ばすといふことに決めた（傍線筆者）[29]

北垣は，平野国臣に会い，本多・平野も加わって決起中止で動いてゆく。

翌日，本多は北垣を飾磨に向かわせた。進藤俊三郎は，「竹田に行つて待つて居れ」[30] とのことであったが，竹田（朝来市和田山町竹田）に行くが誰もきていず，仕方がないので京都に向かい，京都の小荷駄を鳥取に運び，結局生野の変にはかかわらなかった。[31]

10月9日夕暮れ，沢宜嘉らの一行が飾磨（しかま）（現姫路市飾磨区）に上陸した。北垣は平野国臣にも会った。この夜平野が決起中止を説く。しかし一行，とりわけ南八郎，戸原卯橘などは説得を頭からしりぞけた。北垣の「但馬一挙の真相」は，次のように書く。

> 私は直に飾磨に出まして沢公を待受けます積りでありましたが，其途中で沢公は網干（現姫路市西南部―高久）といふ所にお著（着）になつたといふことを聞きましたから，其処にまいりました所が，其処から又飾磨に船をお廻しになつたといふこ

とで，飾磨に夜駆付て，段々松田や野村の意見を具申して，因州に潜行せられんことを勧告しましたけれども，なかなか承知がありませぬ，又随つて居る人も一人も同意しない。[32)]

北垣のこの場面では，平野国臣は登場しないが，『生野義挙と其同志』に所収されている「川又左一郎口上書」でも，平野国臣が説得にあたったようである。しかし，かえって逆効果であった。

1897年（明治30）10月に刊行された馬場文英編『尊王実記』は次のように，くわしく書くが，総じてそのようなものであったと思われる。長いがそのまま書く。

南八郎ノ徒及ビ壮士輩，戸原卯橘等各進退茲ニ究マレド嘗テ承服セズ，折角斯マデ士気奮起シタル際ニ臨ミナガラ，大和勢ノ敗軍ニ聞畏シテ，敵ノ旌旗ダモ見ズシテ逃亡センナドヽ，世上ノ嘲弄ヲ慙愧セザランヤ，且ツ丹波，丹後，但馬ニハ頗ル有志数多住居スル由，予テ聞及ビタレバ，旁タ彼地ニ抵リ，同志ノ徒ニ戮力シテ，義兵ヲ挙ゲ，再度大和ニ押寄セ，中山侍従公子ノ残党ヲ駈集メ，弔合戦ヲ催シ，若シ天運焉ニ極リ勝利ヲ得ズ，戦没ナストモ，英名ヲ万古ニ伝輝センコソ大丈夫タルモノヽ本懐タル可シト，大イニ憤激ス。国臣己レ巨魁ニ列シ，前ニ壮士輩ヲ煽動シテ，其国ヲ脱走セシメナガラ，大和ノ敗軍ノ確報ヲ得ルヤ，意算齟齬シ，如此大事ヲ誤リ，沢殿ニ対シテモ申訳ナク，同志数輩ニ向ツテモ面目ナク，其心中シテ茫然タリ。況ヤ，血気壮烈ナル勇士等ガ，激論ヲ持テアマシ，応エ難クテ黙止セリ。之レニ依テ諸勇士，此上ハ沢殿ノ意見伺問シテ，結局ヲ決定セントス。沢殿ハ最前ヨリ席上ノ議論ヲ聴聞セラレタルガ，此時諸勇士向カヒ，我固ヨリ大和義徒等ガ周囲ノ難ニ陥リ，不日ニ攻滅レン事ヲ其惻怛ノ心ヨリ愍恤シ，座視傍観スルニ忍ビズ，之ニ応援セント苦慮シタルノ際ニ臨ミ，国臣来テ和州義徒ノ危急ヲ報ゲ，応援ヲ謀ル。其趣意ノ我ガ意ニ適当スル故ヲ以テ，他ノ異見ヲ用ヒズ，同意ヲ議リ，三田尻ヲ脱セリ。而ルニ今聞ク，議論ニ拠レバ力無シ。去ナガラ復タ寥々防州ニ帰邑スル事ヲ得ンヤ，身体存亡，茲ニ極マレリ。斯テハ右モ左モ各有志ノ意ニ委ネント曰タマフ。是ニ於テ，血気ノ壮士，又大ニ勇ミ立，義挙主トシテ憤激ス。国臣ハ天運茲ニ尽ヌルヲ察スルト雖モ，今ハ罷ムヲ得ズ，終ニ同意スルヲ以テ，義挙ヲ発スルニ決シ，其夜ハ此ニ一泊シテ，翌十日未明ニ姫路ノ城下ヲ発シテ，山陰道ノ方ニ赴カントテ北ニ向ウ。[33)]（傍線筆者）

（原文は句読点はないが，『生野義挙と其同志』同様，句読点を付す）。

ここでは，平野に対する不満が，充満していた。南八郎，戸原卯橘，さらには沢宣嘉

も平野の言を信じて但馬行を決めたのである。[34] しかも,「サレバ迚復防長ニ帰国スルヲ得ズ」すなわち決意をもって長州を出た以上，なにもしないで帰ることはできないという心理も働いていた。[35] もっとも平野の方針は,野村和作（靖）の方針に従うものであったが，南・戸原，そして沢にとってはあくまで平野の方針でしか映らなかったであろう。それともうひとつ,「丹波，丹後，但馬ニハ頗ル有志数多住居スル由，予テ聞及ビタレバ，旁タ彼地ニ抵リ，同志ノ徒ニ戮力シテ，義兵ヲ挙ゲ」という南八郎の発言に示される如く，但馬には支持者は多いはず，という幻想が南にはあったと思われる。そのことは，平野らが三田尻で但馬の農民らの「忠孝心」の厚さを説いてきたことが背景にあった。現に，美玉三平の「日誌」にも「京都ヨリ僅三四十里ノ地方屹度兵備可有之候処，農民等忠孝之志厚ク有之趣ニ付，農兵ノ組立当今切迫之時勢ニ付出来候様有之度候」と語っていた。[36] もっとも，美玉の文には「勿論其功績ニ依リ屹度可及沙汰候帯刀之儀者差許候間此段相心得周旋可致候事」[37] という功績により帯刀を許すという餌も用意されていた。ともあれ，昭和戦後稲田耕一氏が『木ノ谷に残る勤王志士美玉・中島両氏の伝記』で「農兵達が自分らの様に尊王攘夷の志士の如く鉄の様な意思の持主と信じすぎて居たのではないか」[38] という推測も成り立つ。ただし，南はともかく農民出身の北垣は地元であり，しかも農兵の訓練がまったくできていないという点で幻想はなかったとみていい。

結局，平野国臣は飾磨では，南八郎，戸原卯橘ら強硬派を説得できなかった。平野，北垣はやむなく一行に同行し，途中で本多素行によりもう一度説得しようという手段をとった。10月10日一行は夜船着場である仁豊野（にぶの）（現姫路市仁豊野）の奥田屋に一泊した。

> 飾磨に夜駆付て段々松田（正人―高久）や野村（和作―高久）の意見を具申して,因州に潜行せられんことを勧告しましたけれども,（沢公は）なかなか承知がありませぬ。随つて居る人も一人も同意しない。遂に私がさう談じて居る中に，飾磨から川船を拵へて――姫路の西の方から川船を通じて居りますから，其川船に乗つて発足せられるといふわけで私も致方がありませぬから，其船に一緒に乗つて姫路の北の方に行って，途中から上つて，さうして二生野（仁豊野）といふ所で本多と出会つて，本多にどうも此方の勧めることは採用にならぬ，野村の意見も松田の意見も迚も行はれぬ，併しこれは一大事であるから，君の力を以てもう一応（度）論じて見て呉れ，といふことを本多に話しました。[39]

仁豊野で本多素行ははじめて沢宣嘉にあって挙兵中止説を説得するが，その本多の説得に対して座敷の襖の陰で「卑怯者，斬れ，斬れ」とののしる声があがった。[40]。『生野義挙と其同志』の表現では,「平野国臣，本多素行，北垣晋太郎等の面々は中止説，南八

郎，戸原卯橘等の面々は挙兵説をとつて動かずして，飾磨に於て二派に分かれたものが，此所まで持越されたのであった」。[41]

しかし結局，南・戸原の挙兵説をとめることができず，一行は屋形（神崎郡市川町屋形）に向かって進んだ。

挙兵中止論と挙兵決行論，事実上どちらが主流であるかは明確ではないが，建前としては挙兵せざるを得ないという心理が生野の変の瓦解につながっていく。やはり『生野義挙と其同志』の表現では,「国臣, 素行, 晋太郎等も内心平かでなかつたに相違ない」[42]。あとは「瓦解」への道である。

3　北垣晋太郎と生野の変

3.1　生野の変

11 日，一行は生野の森垣村延応寺に入る。延応寺は生野の代官所を高台より見下ろす位置にあった。この時，北垣晋太郎は，『尊王実記』では，次のように記されている。

> 北垣晋太郎国道ハ沢殿ニ随従シテ帰但シタルガ，円（延）応寺ニ着陣アルヤ，<u>此処ヨリ農兵募集周旋ノ為ト云ヒテ</u>即刻八鹿村ノ方ヲサシテ赴ク[43]（傍線筆者）

また，この時北垣が八鹿村をめざして進発してから 13 日までの北垣の動向についてはよくわからない。

ともあれ一行はその夜には猪野々（現朝来市生野猪野々）の丹後屋次郎左衛門方に移る。この 11 日夜も，論争はたえなかった。『尊王実記』では平野はこう主張する。

> 各士等ノ存志最モ恃モシトモ又潔ヨシト雖モ，自ラ最後ヲ潔ヨクスルヲ以テ主トセルノミナラズ，国家ノ後患ヲ顧リミザルハ思慮乏シキニ似タリ，去ナガラ死ハ易ク生ハ難シ，斯テハ迚モ勝算ノ目適占ム可カラズ，今猛猪ノ奮激ニ逸リ，惜タラ命ヲ殞サンヨリハ，寧ロ一端此席ヲ退散シテ，各士等憤怒ヲ忍ビ，何国ナリトモ暫時躬ヲ潜メ命ヲ全フシ，時節ヲ待チ，再挙ヲ謀ルニ如カジ，斯テ天運帰スレバ，復タ如何ナル幸福ヲ得テ，素志ヲ達シ成功ヲ遂グルノ時アルヤモ知レズト[44]

しかし，河上，戸原は承服しなかった。かえって憤激を増した。『尊王実記』によれば，双方の議論を聞いた沢は，次のように言ったという。

> 今平野ガ演述ヲ聞ク所ニ拠レバ，各士始メ我等共迚モ兼テノ渇望此ニ齟齬スルニ大ニ失望シ，且ツ困却当惑セリ，然ル上ハ何ヲ以テ目適トセンヤ，所詮素志ヲ達シ快復ヲ図ルコト難カルベシ，去ナガラ是レ全ク平野一人ヨリノ過失ヨリ出タルニアラ

ザレバ，強テ彼平野ノミ譴責スルニアラズ，コレ皆一列ガ不幸ノ為ス所ナリ，故ニ己レ苟モ元帥ノ任ヲ踏ミ，各衆ノ属望ヲ受ケタル以上ハ，我身一死ヲ以テ天朝ニ詫奏薦，而シテ後各士等ハ一刻モ速ヤカニ此場ヲ退散シテ，何国ニナリトモ暫ク潜居シ時節ノ到来ヲ待チ，再挙ヲ図ルベシト[45]

沢はそう言って短刀を抜き自刃せんとする有様であり，美玉三平，旭建（木曽源太郎）および左右列座の志士らがとりすがりこれをとめるという情景もあったという。また南八郎，戸原卯橘，白石廉作らもともに自刃せんとする情景もあった[46]。沢の発言は，この段階になって南・戸原と違う地平，すなわち挙兵中止論へと向かう地平をもうかがわせる。

これが，11日夜丹後屋での会議の情景であった。

12日8つ時（午前2時頃）南引き入る長州勢を先頭に陣屋に向けて進発し，それからしばらくおいて沢宣嘉が警護の浪士に囲まれて代官所陣屋前に乗り込んだ。急を聞いて駆け付けた代官所元締武井正三郎に対し，浪士10数名は陣屋の貸与を要望し，武井はおだやかにこれに応じて12日明け方代官所を無血占領した。すでに，武井は出石藩と姫路藩に対して討手を差し向けるよう密使を立てていた。

なお，この日陣容が成る。総帥が沢宜嘉，総裁御側役が田岡俊三郎と森源蔵，総督が平野二郎（国臣）と南八郎，議衆が戸原卯橘と横田友次郎と旭建，軍監が川又佐一郎と小河吉三郎，録事が藤四郎，使番が高橋甲太郎，節制方が中島太郎兵衛，美玉三平，多田弥太郎，堀六郎，周旋方が中條右京，太田六右衛門，太田伍一郎，農兵徴集方が黒田与一と長宗我部太七郎，兵糧方が小国謙蔵と小川愛之助，大谷仁右衛門等である。[47]

なお，この「陣容」にはもともと決起中止派の北垣晋太郎と本多素行の名がない。[48]さらに，丹後屋において，「軍規」も定められる。

また，13日には3年間の年貢半減が南八郎の名で出された[49]。総大将沢の名ではなく，南の名で出されたところに意思統一の無さが明確に読み取れる。

その頃，動員された農民兵が，竹槍，鉄砲などをもって代官所にかけつけた。

この，生野に参集した農兵はどの程度の人数であろうか。史料により2千から3，4万と相当な数の開きがあるが，前嶋雅光氏は『幕末生野義挙の研究』で「参加村々の戸数が即動員兵数と考えてよかろう」[50]として，「義挙時の動員兵数は少なくとも四千数百で，おおむね一万に近い数であったろうことが考えられる」[51]とするが，農兵が即時に集結したわけではなく，養父市場組合の村々など一村も参加しない村もあり，結局数はわからないとする[52]。また，高階一一氏は，「生野代官の届書によると三千人となっておりこ

れが先ず正確なものでないかと考えられる」[53] としている。

また，武井が密使を出した出石藩は1番手が13日出発，950人，騎馬3人，が養父市場到着，姫路藩は14日から繰り出され，総勢1000人余り（内騎馬は10人）であった。京都守護職松平容保は出石・姫路の出兵と同時に，丹波柏原藩，同宮津藩，同福知山藩，但馬豊岡藩，播州龍野藩の諸藩にも人数を差し出すよう命じた。[54] 結局，生野はこれらの諸藩に包囲される状態になった。

この時，本陣の軍議は依然として一致しなかった。平野が「千石（出石藩），京極（姫路藩）而己ニ非ズ，三丹一所ニ攻寄ハ大敵也」としたのに対して，南八郎は気色を変え，「全体此度ノ企手違ニ相成，勢揃兼ヌル抔，足下方被申候得共，諸方之集勢当ニ致シ，多勢小勢抔論ズル者畢竟臆病神之付ニ似タリ」，と進んで出石勢を迎えるため山口（現朝来市）の妙見山に陣を敷く作戦であった。[55] このように「本陣の論が一致しなかつた事は運上蔵の地役人等がつひに気付いて了つた」。[56]

「藤本義芳日記」はその内部分裂の様相を次のように言う。

> 浪士共相集り勢の義は何分不和不一致の様子，今夜には，荷造仕度の様子に被察候御運上蔵に罷出，内々木村善左衛門様迄内談致置候[57]

このような状況の中，13日夜，沢宣嘉と旭建，多田弥太郎，田岡俊三郎，森源蔵，関口泰次郎，高橋甲太郎が脱出し，しかし別れ別れになり，結局沢に随従したものは田岡，森。高橋の3人となった[58]。

14日，沢の脱出があって，本陣でも「其夜御帰リ無之ニ付皆々狼狽シ退逃ス」[59] という状態になった。その結果，残された農兵たちの間には，「偽浪士」の風説がおこり，段々と浪士たちに反感を持つようになっていった[60]。本陣の状況は「藤本義芳雑記」がつぎのように伝える。

> 今晩八ツ時（午後十時頃―高久）頃，浪士退散致シ候趣ニ付，早速御陣屋ニ駆付候処，本陣廻ニハ鎧甲脱捨，御代官様御居間等ニハ，食事之残リモノ等有之，能々周章致シ候ト相見候。左モ見苦敷事ニ有之候[61]

しかし妙見山の南八郎一派は退去する気配をみせなかったため，伊藤龍太郎が妙見山に乗り込み説得を試みたが，南らはこれに応じなかった。7つ（午後4時）頃，南たち13名が山を下りきたが，銃を持った農民らにさえぎられ，山口村の山伏岩裏で南八郎ら長州奇兵隊10名（南，白石廉作，長野清助，下瀬武彦，小田村信一，伊藤三郎，伊関英太郎，久富惣介，和田小伝次，西村清太郎）および戸原卯橘は自刃し，永田左衛門（河内の人），草我部某は藪中で刺し違えて息絶えた。[62]。

逃亡した人びとには，それぞれの運命がある。川又佐一郎，木村辰之助，片山九一は納座村（現朝来市）で捕縛される。同じく納座村で小河吉三郎は自刃する。森垣村（現朝来市）で伊藤龍太郎・三牧庄蔵が捕縛。猪篠村（神崎郡神河町猪篠）で中条右京・長曽我部太七郎が農民たちの銃弾により討死。宍粟（しそう）郡木ノ谷村で美玉三平・中島太郎兵衛の二人がやはり農民たちの銃弾により討死，黒田与一郎が捕縛される。福崎で本多素行が捕縛される。15日，城崎への途中，上網場村（養父市八鹿町上網場）の旅宿で豊岡藩兵により平野国臣・横田友次郎が捕縛される。そして捕縛されたものも後獄死の運命をたどる。[63]

3.2　北垣晋太郎の「破陣」

生野の変が始まる11日から13日まで北垣晋太郎が何をしていたか不明であると述べた。北垣の動向についてはいくつかの史料がある。まず，『兵庫県史　史料編　幕末維新1』に収められている「朝来郡大月村小山六郎手記」（「生野変動記」宮内庁書陵部蔵）の10月11日と13日のところには，次のようにある。

> 翌十一日未明円（延）応寺（播州神西郡森垣村ニ在，是ヨリ生野へ十余町）ニ御届陣之旨下郡へ報知致候，横田友二郎・中島太郎兵衛・吉井定七・小山六郎・黒田与市郎（中嶋太郎兵衛弟也）・習田甚兵衛等太田六右衛門ニ会シ，夫ヨリ直ニ生野ニ到ル，北垣晋太郎ハ御届陣直ニ八鹿村（生野ヨリ九里余北）迄下ル，沢殿（従五位下主水正宣嘉）ニテハ於圓応寺大議論発シ。器械且ツ人数モ尠ク，迚モ成功遂難キ目適ナレバ退散センノ論，又是迄運ヒヲ付，豈退カンヤ，男子死ストモ一ト度ヒ可挙ルノ論紛紜トシテ起リ，ヨウヤクシテ相決シ，同日昼前生野御見物ト唱へ，太田治良右衛門方ニ御越ニシニ相成，此処ニテモ大議論発ス・・（中略）・・翌十三日木村治平・宮本采女高田氏祠（嗣の誤りカ）田次米吉郎右衛門・西村庄兵衛・西村五兵衛・藤井三郎右衛門・西村重右衛門・西村市郎治外数十山口に主張す，上田九左衛門も檄文披見，直に主張候逗（道）中にて豊岡勢に被差押帰村す，北垣晋太郎モ八鹿ヨリ山口（生野ヨリ二里北）迄主張シ，南八郎ト議論シ，夫ヨリ生野ニ到ル，本陣ニテハ議論区々トシテ不決，君側之者曰，此通ニテハ不事成顕然タル，一先退散シテ後日復挙事之論義挙ヲ相立ル[64]

ここでは，まず北垣の動きとしては11日に生野に到着後生野より9里余北の八鹿村に行ったことが記されている。この史料ではなぜ八鹿村に行ったか書いてはいないが，前掲『尊王実記』では「此処ヨリ農兵募集周旋ノ為ト云ヒテ」となっている。[65] しかし，決

起中止論に立っていた北垣が「農兵募集周旋」で動いていたかは疑問がある。実際上，北垣の「但馬一挙の真相」もそのことは一言も触れていない。[66] ともかく，くりかえすが11日から13日の途中まで北垣は生野の代官所にいないのである。

また，「朝来郡大月村小山六郎手記」でも，ひきつづき生野代官所で議論の不一致の状況があったことは触れてある。

なお，「朝来郡大月村小山六郎手記」のその中の「但馬義挙実記」であるが，やはり大月の小山六郎の手記で「山陰義挙実記」がある。両者は大枠はほぼ同じ内容のことを書いているが，両者を比較した時「『山陰』の方が『但馬』より詳細である事から，後者は前者の改訂版的性格のものと思える」[67]。この「山陰義挙実記」は山東町誌編集委員会編『山東町誌』（1984年）に掲載されてある（ただし「なお原文通りでは読みづらいので多少現代風に意訳することを諒としてほしい」とある）。「山陰義挙実記」は「但馬義挙実記」と比較すると，より詳細であることと，北垣の動向をより詳しく，むしろ疑問を込めて語っているのが特徴的である。むしろそのような疑問の部分を排除した「改訂版」的性格をもつのが「但馬義挙実記」であろう。

では「山陰義挙実記」の当該箇所を見てみよう。

夫ヨリ直ニ生野ニ到ル。北垣晋太郎ハ御届陣直ニ八鹿村迄下ル。沢主水正ニテハ延応寺ニ於テ大議論発シ器械且ツ人数モ　平野二郎・北垣晋太郎ヨリ三条公ヘ言上ノ節ト相違致シ京都ヨリ松田正人連二十余人　其他六十余人ノ諸国浪士ノ徒モ参着セズ　其他機械弾薬等長州大阪蔵屋敷ヨリ贈リ来ル筈ナレドモ一向来着セズ　北垣国道ハ大切ナル但馬国ノ案内者ナルガ　コレモ八鹿村ヘ下リ本陣ヘ伺候セズ誠ニ大切ナル事ニ頼ミ少キ有様ユヘ沢主水正殿始メ諸有志モ案ニ相違シ諸論紛々軍議決セズ区々ノ論起リ　或ハ退散セント論ジ　或ハ要害ノ地ニ拠ラント論ジ　又ハ是迄運ビヲ就ケ豈引カンヤ男子死ストモ一度兵ヲ挙グベシト論ジ紛紜沸騰シ漸クニシテ相決シ　同日昼前生野御見物ト唱ヘ　太田治郎右衛門方ヘ御越シニ相成リ　此処ニテモ大議論発シソレヨリ陣屋借受ノ義　応接致シ候処　其節川上猪太郎ハ備中表ニ罷リ越シ留守中ユヘ手代武井正三郎ヨリ役所明ケ渡ス・・（中略）・・翌十三日木村治平・宮本采女・田治米吉郎右衛門・西村庄兵衛・藤井三郎右衛門・西村重右衛門・西村市郎治外数十人山口ニ主張ス。上田九左衛門モ檄文ヲ披見シ直ニ出張途中ニテ豊岡勢ニ差押ヘラレテ帰村ス。北垣晋太郎モ八鹿ヨリ山口迄出張シ　南八郎ト議論シ　夫ヨリ北垣ハ生野ニ到ル云々。参謀木曽源太郎曰ク　吾レ十四日ノ落城マデ生野ニ居タルガ北垣ハ見受ケズ不審ナリ。又曰ク元帥沢主水正殿曰ク余既ニ売ラレタリ。田

岡俊三郎・本多素行モ曰ク吾輩売ラレタリ　コレニ於テ之ヲ考フルニ北垣ハ本営ニ来タラザルハ著名ナリ。却説本陣ニテハ議論区々トシテ決セズ，元帥近習ノ者曰ク此ノ通リニテハ事ノナラザル事顕然タリ一先ズ退散シテ後日復タ事ヲ挙ゲントノ論ヲ立テタリ。[68]（傍線筆者）

この中で「元帥沢主水正殿曰ク余既ニ売ラレタリ。田岡俊三郎・本多素行モ曰ク吾輩売ラレタリ」は，生野に疑心暗鬼が渦巻いていたことを示している。北垣だけではない。平野国臣はその矢面に立っていた。「平野氏足下ノ偽謀詐術ニ誘因セラレ，此方迄来リ敵ノ旗色ダニ見ズ，大和義徒ノ敗軍ニ聞キ怖デ，何ノ面目アリテ，凄々帰国ナスヲ得ンヤ，是レ後世ノ恥辱此上ヤアラン」[69] と最初に事情を知った時の南八郎の激昂ぶりがよくわかる。

また，11日から13日まで生野をあとにして，八鹿村まで出かけ，13日になって山口村まで来て，「南八郎ト議論シ」という北垣の動向は判然としない。北垣の「但馬一挙の真相」でもそのことは語られていない。

また「南八郎ト議論」は相当激烈で，南から非常に侮蔑的な言葉を浴びせられたとしているが，そのことを記した『銀山新話』は「粉飾が過ぎてゐて，俄かに信用が出来ない」と『生野義挙と其同志』はする。[70]

北垣は大和の破陣後一貫して挙兵中止の位置にいた。生野の陣の現場では表面上南八郎のような直情的なものが主流でありその雰囲気が横溢していたが，それは北垣の筋書きとは真逆の動きを直進していた。

4　生野変後の北垣と森寛斎

4.1　生野の変後の北垣

10月14日朝，平野国臣と横田友次郎は，八代（やしろ）（現朝来市八代）から建屋（たきのや）（現養父市建屋）を越え，長野（現養父市長野）の信行寺で甲冑を脱ぎ捨て，北垣を訪ねた。北垣は家に居らず，町村（まちむら）（現養父市建屋）の北垣の叔父川尻屋北村平蔵の家で北垣晋太郎にあうが，別々になって因州に落ちようという北垣の意見により分かれた。[71]。北垣は，商人に姿を変え，大家谷の奥明延の富士野（ふどの）峠を越え，播州宍粟郡の繁盛（はんせ）村（現宍粟市一宮町）に入ると，見張りの農兵が道をふさいでいた。したがって八鹿村（現養父市八鹿町）に引き返し，家僕の家に潜む。翌日西村哲二郎の弟良三郎が来て，西村哲二郎が因州に脱出したことを告げる。これにより北垣は因州行を決し，その夜八鹿村を出て須賀ノ山（氷

ノ山）を登り，山を越えて山麓の一村に宿す。[72] 18 日，鳥取に着し，西村哲二郎（太田二郎）に会う。その後，鳥取の同志を訪問するが，みな国にはいなかった。意を決して西村と共に鳥取を去って京都に上り，因州邸に潜伏した。[73]

生野の変後，因州そして京都に逃れた北垣晋太郎については，進藤俊三郎の伝記，すなわち『原六郎翁伝』によって大まかなことがわかる。京都の因州邸に潜伏した北垣と西村は，京都で進藤俊三郎に会うことになる。北垣・進藤・西村は，その後 12 月 28 日に京都を発し，翌元治元年（1864）1 月初め，江戸に入る。因州藩士で剣客千葉重太郎のもとに 4，5 か月潜伏し，のちに赤坂檜町の長州屋敷に移る。[74] 元治元年 7 月 19 日，禁門の変がおこる。この時 7 月 25 日，江戸の赤坂檜町の長州屋敷に潜んでいた原・北垣ら 10 人ほどが西上する。この日の夜，江戸の長州屋敷が幕府方に襲われ，多くの人間が投獄され，あるいは殺された。危機一髪であった。この禁門の変では京都六角の獄に収監されていた生野の変関係者，平野国臣，本多素行，横田友次郎，黒田与一郎の四人も殺された。[75] 彼らが京都に着いたとき，禁門の変の帰趨も定まっており，そのため北垣・進藤・西村は伯耆国黒坂（現鳥取県日野郡日野町黒坂）の幽居に河田佐久馬を頼る。しかし，河田は文久 3 年 8 月 18 日の「因州藩二十二士事件」のために蟄居の身であり，3 人は伯耆の江波家に潜伏した。[76] さらに 10 月頃，河田の紹介により，北垣と進藤が西村を残し，備前岡山藩の家老伊木長門守を頼って岡山に移る。伊木のもとで潜伏中，第 1 次征長の役が起きる。この時，伊木は進藤（原），北垣の両人を広島に赴かせて形勢を探るが，11 月，長州藩は幕府へ恭順の意を表し，両人は伊木にこのことを復命し，しばらくして伊木の知行地の備前の児島（現岡山県倉敷市）に潜んでいた。[77] その後進藤と北垣は京都に上るが，長州におもむくことを決し，慶応元年（1865）春，何人かと途中讃岐で船待ちをしているときに高杉晋作に会い，その添書をもって長州に入った。慶応 2 年（1866）6 月，第 2 次征長の役がおこるが，進藤（原）の場合，遊撃隊に入り，それから他の隊に変わった。そして，小倉口の戦争に加わる。[78] 戊辰戦争期には，原は河田佐久馬を隊長とする山国隊へ司令として加わり，北垣は新政府軍の北越戦争に加わり，越後の戦闘に参加し，功により鳥取藩の応接方になる。その後明治政府に出仕する。

なお，常に青谿書院以来北垣・進藤（原）と同道していた西村哲二郎（太田二郎と変名）も北垣・進藤（原）と同様に長州に走ったが，その後慶応 2 年（1866）1 月，不慮の出来事のため自刃する。[79]

なお，北垣は生野の変後いつの時点からかは不明にしても柴捨蔵と変名している。[80]

4.2　北垣と森寛斎

北垣にとって特筆すべきことがある。生野の変の後，すでにみたように北垣は因州―江戸―京―備前―長州と逃れるが，その過程で長州藩士の画家森寛斎が北垣の命を助けたということが伝えられている。

1900年（明治33）3月刊行の森慶造『近世名匠談』に，森寛斎と北垣国道について次のような記述がある。慶応元年（1865）以降の事であろう。

> 寛斎が始(ママ)めて長州に帰りし時なるが将た二たび帰りし時にゃ，今の男爵北垣国道を救いたりき，そは国道もいまだ柴捨蔵と称したる頃にて，生野銀山の義挙に加はりしが，戦破れでその領袖たる平野國臣は幕吏の捕獲する所となり，南八郎，戸原卯橘など皆陳歿し，義徒悉く潰えて，国道は辛くも身をもて免れ，長州へ潜行するに，偶ま奇兵隊に訝しまれ，幕府の間諜なりとて将に首を刎ねられむとす。この時運よくも寛斎通あはせてその刀を止め，この士は銀山の義党一味の人に紛れなし，我もかつて屡々会して国事を語りきとて百方弁疏し，之をそが志す処まで行かしめたりき，寛斎が当時その過ることなかりせば国道は空しく刀下の露と消え果て後に聖代の遭ふことは得ざりしなり。然れば後に国道は大いに之を徳とし，そが恩に酬る所あらむとせしも寛斎が人と為り淡泊にして金銭などの贈をうけざるを知るからに，唯だその尤も嗜める物を贈りて老後の心を楽しましむるに如かずとて，維新後は北海道，東京また熊本にありても，断えず美酒を贈りたり，後国道の十四年二月に知事として京都に行くや一，二日ごとに寛斎の家に到り，その礼いと厚く，あたかも厳父に仕ふるものの如くなりき，こは能く世人の知る所なり。（傍線筆者）[81]

森寛斎については，その詳しい履歴が『京都府百年の資料　八　美術工芸品』に記載されている。それによれば，寛斎は文化11年（1814）長州萩毛利家の家臣石田伝内道久の3男として生まれた。北垣とは22歳の年長である。天保6年（1835）大坂の円山派森徹山の門をたたき，天保9年（1938）には森姓を与えられ徹山より京都に画塾を開かせることとなった。この頃より平野国臣・河瀬太宰・谷鉄臣・山県狂介・品川弥二郎に交わり，一時画業よりも志士活動を優先した。維新後，画壇に復帰し，如雲社に加わり，その後如雲社の中心的存在になる。1880年（明治13）京都府画学校が開校すると，そこに出仕し，次第に京都画壇の伝統的勢力の回復する中心的存在に存在になっていく。[82]

さて，北垣国道の日記『塵海』には，森寛斎が登場するのは，5回である。北垣の日記「塵海」にわずか5回しか登場しなかったのは，あくまで私的なことは出来る限り「塵海」には記述しなかったためと考えられる。したがってこの5つのことは，おそらく半ば公

的なことであったろう。たとえば，その1つ1882年（明治15）12月1日の「午前十一時森寛斎来，品川伝言アリ」は，イギリス公使パークスが奈良正倉院御宝物拝観のことを品川弥二郎に依頼し，そのついでに12月2日に京都にきて品川が西本願寺で饗応することがあり，品川と親しかった森寛斎が北垣にそのことを伝えたのであろう。

では，森寛斎の「日記」では，北垣のことをどの程度に表現しているだろうか。森の「日記」は，『京都府百年の資料　八　美術工芸編』に収録されているが，現在まで残存しているところでは，1885年（明治18）は2月1日～11月23日まで，1886年（明治19）は8月6日～9月11日まで，1888年（明治21）は1月1日～12月31日まで，1890年（明治23）は1月1日～12月31日まで，1891年（明治24）は1月1日～12月31日まで，1892年（明治25）は1月1日～2月10日までの6年にわたっている。この6年間の日誌でも，北垣の日記「塵海」よりはるかに7倍ほど「北垣」との接触記事がある。すでにみたように「塵海」で森寛斎の登場がわずか5回であるのに対し，森寛斎の「日記」では北垣および北垣関係者の登場が6年の間に39回である。[83]

『近世名匠談』で北垣が森に対し，感謝の意味を込めて酒を送っていたことは記述されているが，たしかに北垣が森に対して酒を贈与していたことが森の日記からみえる。1885年（明治18年）11月13日には「國井，北垣ヨリ酒五斗至来」[84]，1888年（明治21）8月7日には「北垣公ヨリ隊（ママ）長壱樽至来須」[85]，同年11月1日には「北垣公ヨリ酒樽至来」[86]の記事がある。また，1890年（明治23）においては，北垣の記事があるのは9回であるが，その内の5回が「北垣入来」である。たしかに「国道の十四年二月に知事として京都に行くや1，2日ごとに寛斎の家に到り」というほど極端なものではないにしても，割合頻繁に森寛斎の家に行っていたことがわかる。また，1888年6月7日には，「本日蹴上ケ疏スイ第三開口式，北垣公ヨリ車ヲサシ向ケラレ春挙誘行，午後三時コロ帰宅」[87]とあって，6月7日には琵琶湖疏水本線第3トンネル（宇治郡日岡村～蹴上）が貫通し，近府県の地方長官や上下京の区民を招き（8日・9日は諸人の縦覧），南禅寺村で花火や同隧道東口で軽気球の打ち上げなどの一大イベントが開催された時[88]，森寛斎も北垣より車をさし向けられ，弟子である山元春挙を誘ってこのイベントに参加した。

森寛斎は1894年（明治27年）6月2日，京都室町二条の自宅で享年81歳で肺炎のため死亡するが，北垣はその死を日記の中に記し，「亡友森寛斎翁」と位置づけた。[89]

おわりに―一つの石碑と一つの祠―

生野の地から遠く南下した現宍粟市山崎町の美国神社（旧木ノ谷村）には，美玉三平，中島太郎兵衛，黒田与市郎（中島の弟）の3人がこの地まで逃れた痕跡がある。500ほどの数の農民らの執拗な追跡により美玉が銃弾に倒れ，中島も銃弾に討たれ，黒田は兄を介錯したのち自ら縛についた（慶応2年12月9日黒田は牢死）[90]。そして同神社には美玉，中島の終焉の地として，生野の変の28年後である1891年（明治24）に建てられた石碑がある。この石碑には「美玉中島両氏之墓」と記され，台座にこの石碑建立にあたっての寄付者の氏名と人数が記されている。寄付者は各20円が北垣国道と林董（ただす），あと各1円から3円まで37名の賛同者の氏名がある。氏名は剥がれて見えない部分もある。北垣は1891年当時京都府知事，林は1890年（明治23）3月兵庫県知事になり，翌年6月外務次官に転出するので，この石碑は1891年6月の間に林が資金を出したのであろう。

美玉三平，中島太郎兵衛は，ともに北垣と大いに関係がある。美玉はすでに見たように北垣と同道して馬関に入る。その後も北垣との接触はある。中島は，養父郡高田村の大庄屋で，家が第2回農兵組立会議の会場を提供するなど地元での首魁である。この第2回農兵会議で，中島は，横田友次郎，太田六右衛門等とともに但馬に居残り，農兵徴募に従事，かつ訓練にあたることがきめられる。しかし10月11日の臨戦態勢の役割分担で「農兵徴集方」を担うのは弟の黒田与一郎と長宗我部太七郎であり，中島は美玉三平，多田弥太郎，堀六郎とともに「節制方」で，農兵徴募編成，武器弾薬の用意を担当した。[91] また，生野の変の破陣後，北垣の母リキは窮乏の極に達し，中島太郎兵衛の子太四郎に泣き付き，平野国臣の著作『神武必勝論』上中下3巻の内の中巻を譲り請け，これを八鹿の西村庄兵衛に買い取ってもらい，一時の危急をしのいだといわれている。[92] 北垣の母リキに対する特別な感情からしても，[93] さらに中島が在地の中心人物であった点からいっても中島は北垣にとって重要な位置にいたことがうかがえる。

また，現兵庫県養父市能座の北垣の生家は小高い丘の上にある。そこには大きな榧（かや）の木が残っているだけで，人家はすべて取り払われている。この榧の木は「ヒダリマキガヤ」としては全国最大で1951年国指定天然記念物になる。その榧の木の横に小さな祠がある。この祠は，上部に「忠魂社」と明示されているが，内部は現在南京錠がかかり見ることはできない。しかし高階一一氏によると，「建立された年代はさだかでないがおそらく明治二十年頃と思われる」とし，この祠は「北垣国道自ら建てられたものである」[94] とする。祠は，「総桧造りのごく小さな祠であった」が，「昭和三十年代台風によって壊

れ一時撤去されていたが，先年親族によってコンクリート造りで再建された」[95]。この「忠魂社」の内部はすでに記したように見ることはできないが，祠の裏に掲げられた名板には，8名の「祭神」が書かれている。8名の「祭神」とは，順番に「平野次郎国臣」,「本田（多）素行」,「美玉三平」,「中島太郎兵衛」,「太田六右衛門」,「西邨（村）哲次郎」,「西邨（村）十右衛門」,「長宗我部太七郎」である。ほとんどが生野の変の参加者であるが，西村哲次郎は生野の変の現場にはいず，青谿書院の同門で慶応2年1月長州で切腹する人物である。あとの7名は生野の変に直接参加する人間であるが，平野，本多はすでにみたようにもともと決起中止派に属す。美玉，中島は前述した。太田六右衛門は竹田町の名士であり，中島同様志士が集まって情勢分析をする家であった。10月13日の陣容は，中條右京（出石）太田伍一郎（竹田）とともに諸事買い入れ方を担当する「周旋方」であった。10月13日には，伊藤龍太郎の推薦により沢の書簡を出石に派遣する使者となるが，出石で捕縛された。慶応元年（1865）1月24日，牢死する。[96] 長宗我部太七郎は，阿波人で，もともと黒田家の御用達津島屋（大阪中之島）の店員であったが，中山忠光が大和に向かうとき，後より大和に行ってこれに加わった。後に平野国臣の使命をうけて，平野とともに但馬に入った。10月11日の陣容では，黒田与一郎とともに「農兵徴集方」を担当した。10月13日には，南八郎ら長州奇兵隊とともに，通称妙見山に登るが，伊藤龍太郎の説得に賛成して，南らと別行動をとり，中條右京とともに下山する。しかし，下山後，長宗我部，中條は猪篠村で農民たちの銃で倒れる。[97] 西村十（重）右衛門（八鹿村）は，養父明神山別当所（普賢寺）における第1回の農兵取立会議に出席している。また「山陰義挙実記」によれば，10月13日には地元の人びとととともに山口村に出張している。さらに，生野の変後の文久3年11月27日には，仮牢入になっている。[98]『嗚呼榧の木さん國道さん』によれば，この8人は「いずれも生野義挙関係で果てた同志である」としており，西村もその後死去したのであろう。[99] 西村十（重）右衛門についてはこれ以上のことは不明であるが，少なくとも地元の名士で決起強硬派ではないことは確実である。

以上のことから，北垣が選定した8名は，南八郎ら長州奇兵隊10名および戸原卯橘の決起強硬派[100]，さらに沢ら脱出組とも異なる。長宗我部は平野との関係以外はよくわからないが，北垣と親しい人間以外は地元但馬の人間であったようである。北垣がなぜこの8人を「祭神」としたのか，明確に判るわけではないが，少なくともこの8人の北垣の選択肢を見ることができる。

さて，生野の変後，一貫して主戦派で壮絶な死を遂げた南八郎は生野周辺では評判が

良かった。『生野義挙と其同志』でも「南は，骨力の優れた烈しい気性の人物らしかったが，生野の町民や乃至山口村民の間には甚気受が良かった，浪士の先頭に立つたため，定めし悪まれて居るだろうと思ふと決してさうでない，浪士の中に於ても，最も物の判つた，そして又，最もやさしかつた立派な大将分であるとして，其の当時から殊の外尊敬されて居つたのである」[101] とあるし，生野の変時の史料「藤本義芳雑記」も「南八郎ト申者ハ勇気絶倫ノ士ト承ハリ候，今般当所ニ来リ候浪士中ニ而モ，中ニハ乱暴放火等致半ト申者有之候徒共，南八郎差止候。又小国謙蔵ト及刃傷候半ト申居節モ，八郎差止候由慥ニ承候，惜シキ勇士ヲ失候ト人皆相惜ミ候事」[102] と，南をたたえている。

これに対し，北垣が大和の破陣，大阪の長州藩士の帰国後生野での決起に対して決起中止に身を置いていたことは明らかである。しかし彼の行動はきわめてわかりにくく見え，結局逃げのびる行動をとったといってもよい。しかし逃げのびる行動だとしても，北垣自身常に死と隣り合わせの行動であった。

明治以後になって「生野義挙」と生野の変が持ち上げられたとき，そして南八郎が持ち上げられたとき，北垣自身心情的に違うものを感じていただろう。北垣が，生野の変について，「此一挙といふものは誠に儚ない瓦解で事は終わりましたのであります。けれども，此御一新の一つの動機になって居ることは疑いはあるまいと思ひます」と一応は評価をしているようにしながら，結局「（生野の変は―高久）立派な仕事というものは一もありませぬ」[103] というとき，ほぼ本音の部分を表しているといってよい。

北垣は明治2年頃松田正人（道之）の推挙もあって，鳥取藩士になっていく。そしてその後の活躍，とくに京都府知事になって，京都宮津間車道工事や琵琶湖疏水工事など明治の地方官として活躍していく。

北垣が生野の変にかかわった時代は，多様な意味を含めた「攘夷」と草莽の時代であ

写真1　美玉三平・中島太郎兵衛の墓（石碑）

写真2　北垣国道生家跡の榧（かや）の木と祠（ほこら）（忠魂社）

り，地方の人びともそれにまきこまれた。明治の地方官僚になる北垣国道も明治期とはまったく異なる時代を生きたのである。

（追記）

本稿は拙稿「北垣国道と鳥取人脈」（本誌第 48 巻 4 号）の前史の記述にあたる。本稿脱稿後，新たに判明した事実を簡単に記しておきたい。長男北垣確についてである。確については拙稿「新島襄と北垣国道」（伊藤弥彦編『新島襄全集を読む』晃洋書房，2002 年）で，1887 年（明治 20）2 月頃，北垣が確の英学について新島襄に問い合わせを行い，1889 年熊本英学校の海老名弾正に彼の教育を依頼していたことを明らかにした。問題はその後である。1919 年（大正 8）7 月 1 日より 11 月 27 日まで『京都日出新聞』に村上文芽が執筆した「絵画振興史」をもとに島田康寛は『京都の日本画　近代の揺籃』（京都新聞社，1991 年）の中で確について述べている。それによれば，北垣確（号を静処という）は 1874 年（明治 7）北海道に生まれ，1897 年（明治 30）京都市美術工芸学校を卒業。同年日本美術協会，1899 年（明治 32）全国絵画共進会，美術協会等へ出品，以来しばしば受賞。1904 年（明治 37）中国，インド，欧米に遊び，大正年間に没した，とある（285 頁）。また，確（静処）は鴨緑茶話会という青年画家の一団を組織したが，この会は「（明治）三十五年一月の創立」で「集会所を鴨緑の水瀬，北垣静処氏の邸に置」き，「毎月一回自邸に会合を催して研究会を開き，揮毫もすれば批評もする」（274 ～ 277 頁）会で，「（静処は）費を投じ会員を伴ひて東上し，池田侯，鍋島侯，原六郎等の名門へ紹介したのもある」（276 頁）。この会は「文展の開会と静処の東京仮住とによつて遂に消滅した」（277 頁）とある。

北垣国道が京都市美術（工芸）学校の校舎の獲得に配慮を示したこと（松尾芳樹「京都市立美術工芸学校の教育課程」並木誠士『近代京都の美術工芸―制作・流通・鑑賞』思文閣出版，2019 年）など京都の美術界の動向に関心があったことは事実であり，この点も今後検討してみたい。

注

1）拙稿「北垣国道と鳥取人脈」同志社大学人文科学研究所『社会科学』第 48 巻第 4 号（2019 年 2 月）。なお北垣国道については，日記（「塵海」）があり，この日記は 1881 年（明治 14）10 月 1 日から 1901 年（明治 34）1 月 16 日まで断片的に残されている。日記は京都府立歴彩館が保管している。なお筆者もそのメンバーであった塵海研究会編纂の『北垣国道日記「塵海」』が思文閣出版から 2010 年に刊行された。

2）養父町出身の高階氏の著書は，「私なりに一つの大きな目標がありました。それは國道さんに対する昔からの冷評に答えたい，ということでした。國道さんの人間像を洗えば洗うほどその人格が光って見えます。昔ばなしでいわれるような人ではない，生野事件の際同志を裏切って自分一人の出世というような姑息な行動をした人ではないということを皆さんに知ってもらいたい，それがこれを手がけた動機でした」（『嗚呼榧の木さん國道さん』5

頁）という。地元では，生野の変で多くの人間，とりわけ南八郎（河上弥市）が壮絶な死を遂げるのに対し，北垣が生きのび，しかも維新後地方官僚に「出世」したことに対するある種の感情があったであろう。

3）『北垣国道日記「塵海」』333頁。

4）日本史籍協会編『続日本史籍協会叢書　維新史料編纂会講演速記録　一』東京大学出版会。

5）『北垣国道日記「塵海」』600頁。

6）木曽源太郎は，肥後藩士。文久3年（1863）脱藩して京に上る。同年8月下旬但馬に入り，八鹿町医師国屋松軒方で農民に剣術指導，生野の変破陣後沢宣嘉とともに長州に走る。後徴士・度会府判事。1918年（大正7）東京で80歳で没（前嶋雅光『幕末生野義挙の研究』227頁，409頁）。前木鉆次郎は旧水戸藩士。7卿西下に随従。破陣後長州に下る。戊辰戦争従軍後，1880年（明治13）水戸城西丹下櫻野牧場に移住し，農牧に従事する（同上，228頁。『生野義挙と其同志』381～391頁）。

7）北垣国道「但馬一挙の真相」日本史籍協会編『続日本史籍協会叢書　維新史料編纂会講演速記録一』106～107頁。なお，「但馬一挙の真相」は1912年（明治45）年の時点で生野の変の生存者は北垣と原だけと述べているが，木曽源太郎と前木鉆次郎は生存していた（注6参照）。おそらく北垣はそのことを知らなかったかもしれない。

8）この時，北垣はまだ存命で「目下旅行中」であった（『原六郎翁伝』下巻，269～282頁）。このほかに原六郎は，1914年（大正3）9月29日，「生野義挙事件その他」と題して維新史料編纂会席上でも講演している（『原六郎翁伝』下巻，282～306頁）。

9）『原六郎翁伝』下巻，270頁。

10）同上，下巻，278頁。

11）城崎町史編纂委員会『城崎町史』城崎町，1988年，439頁。

12）『日本歴史地名大系29－1　兵庫県の地名』（平凡社，1999年）689頁，『生野義挙と其同志』7～12頁。

13）『嗚呼榧の木さん國道さん』11～13頁。青谿書院保存会『但馬聖人　付　その後の青谿書院』16～19頁，27～29頁，1983年。

14）北垣国道「但馬一挙の真相」日本史籍協会編『続日本史籍協会叢書　維新史料編纂会講演速記録』東京大学出版会，1969年，85頁）。この「北海の防備に備え」について尊攘堂張まぜ文書では，「代官へ当時自国之形勢にては，農兵を募発し，外は外夷襲来之防禦となし，内は不意乱暴の備と成し可申」（『生野義挙と其同志』133頁）と書かれていることから，「代官所宛という性格上『不意乱暴の備』のためとは，大和天誅組のような反乱に備える必要のためという意味がこめられているが，建白する但馬豪農の真意は，一揆的情勢への備えにあったことは疑うことができない」（高木俊輔『明治維新草莽運動史』84頁）との意見がある。しかし，北垣の意見は，あくまで「北海の防備備え」であった。ただ，これに賛同する人達の意見は様々なものがあったろう。

15）「但馬一挙の真相」86頁。

16）『生野義挙と其同志』44頁。

17)「生野一挙の真相」88 ～ 89 頁。

18) 文久 3 年亥 8 月，北垣晋太郎より久坂玄瑞・寺島忠三郎宛書状（『尊攘堂書翰屏風　十四輯』，京都大学蔵）。

19) 同上。なお，この北垣より久坂・寺島宛書翰について，『生野義挙と其同志』は，「文勢を以て察すれば，北垣のみが農兵募集の斡旋をしてゐたかのように受取れるが，決してさうではなく，美玉は美玉で同じやうに内願運動をつづけてゐた。真木和泉の文久癸亥日記にも，美玉と会見した条項が出て居る。用向は記述してないが，多分此の内話があつたらうと推測丈は出来る」（47 頁），としている。

20)『生野義挙と其同志』155 頁。

21)「但馬一挙ノ真相」『生野義挙と其同志』155 ～ 156 頁。

22)「但馬一挙の真相」96 頁

23)『生野義挙と其同志』156 頁。

24) 田中軍太郎について，因州松田正人の手によって京都に潜伏していたが，慶応 2 年（1866）正月 17 日，獄中で毒殺された（『生野義挙と其同志』473 頁）。原六郎は，「京都では松田や何かに会つたに違ひないが，何所に行つたかわからなかつた。それほど互に親切にもしなかつた。荷物のことについては苦労を共にしたが，之れから先きどうしやうかと云うことなど話し合うた事はない。少し粗暴な男で，私は余り感服しなかつた。」と記す（同右，『原六郎翁伝』上，86 頁）。

25)『生野義挙と其同志』161 ～ 163 頁。

26) 同上，216 ～ 221 頁。『平野國臣伝記及遺稿』によれば，平野・北垣の要請に対して，長州藩は「飽くまでも慎重の態度を執るを必要として急発軽動の策を喜ばず」，「殊に土方楠左衛門の如きは，深く関係せざるを得策とするの説を為し，（三田尻の―高久）招賢閣の内外には，可否の説紛々として起れり」であった。しかし，「大和の義挙の潰敗」は長州に逃げた「諸卿」にとっては傍観することができない状況であり，結局沢宣嘉の事実上の派遣，三田尻に集まる諸方の志士の参加になった（217 ～ 218 頁）。

27)「但馬一挙の真相」104 頁。

28) 同上，101 ～ 102 頁。『生野義挙と其同志』252 ～ 253 頁。

29)『原六郎翁伝』下巻，288 ～ 289 頁。野村靖が，1893 年（明治 26）に私家版として世に出した『追懐録』では，いっさい野村の構想が破綻した事実には触れず，その後の事実のみを以下のように簡略に記すのみである。

　又十月吾藩河上弥一等沢宣嘉卿ヲ推シテ義旗ヲ但馬生野ニ挙ゲタレトモ亦日ナラスシテ戦死ス，是ヲ以テ幕府及薩会連合ノ威勢殆ト天下ヲ圧セムトス，而シテ余ハ曩ニ久坂等ト大仏ニ別レテ桂ノ言ニ従ヒ共ニ京都ニ入リ藩邸ニ潜居シテ吾公ノ冤罪ヲ陳弁スルヲ力ム（マツノ書店，35 頁）。

30)『原六郎翁伝』下巻，289 頁。

31) 同上，下巻，292 ～ 295 頁。

32)「但馬一挙の真相」日本史籍協会編『続日本史籍協会叢書　維新史料編纂会講演速記録一』

102 ～ 103 頁。

33）馬場文英編『尊王実記』41 ～ 42 葉，1897 年（国立国会図書館デジタルコレクション）。

34）この平野に対する不満は，9 月 29 日，土佐藩の天誅組同志池内蔵太が，京都室町四条下がる花屋に止まり武器・弾薬を取り揃えていた進藤俊三郎，田中軍太郎，太田次郎等に対して突然出現し，大和の破陣を知らせた時の進藤の言にも出てくる。

松田ラニモ会ッテ話ヲシタ，野村ノ大坂ノ人数ハ，コノ時国ニ帰ッタ。一番アテニシテイタ人数―武器モソロッテオルシ，カツマタ我々ノ如キ浮浪デナイ，此ノ強イ選リ抜キノ連中デアルガ，呼ビ返サレテシマッテハドウニモナラナイ，仕方ガナイ，松田ナドト話シテトニカク時期ヲ待ツコトニシタ，急激ニヤルノハ，イッタイ無茶ナ話デアッテ，平野二郎ノ攻撃ナドモ始マルヤウナ訳ダ。（p245）（原六郎口話）（『生野義挙と其同志』245 頁）。（傍線筆者）

この話は，1914 年（大正 3）9 月 29 日，維新史料編纂会席上に於ける原の講演「生野義挙事件その他」，『原六郎翁伝』下巻，286 ～ 287 頁にある。

35）『生野義挙と其同志』245 ～ 246 頁。

36）「渓間日乗」『維新日乗纂輯　三』30 頁。

37）同上。しかし，文久 3 年 9 月 5 日の農兵組立周旋方を置く際に，「是等周旋方に任命された者は，頓で苗字帯刀も許されるであろうとの見込みであったが，それも待たずに両刀を佩びで闊歩したものもあったという」（太田虎一『生野義挙日記』31 頁）。

38）稲田耕一『木の谷に残る勤王志士美玉・中島の伝記』山崎町，31 頁。

39）「但馬一挙の真相」102 ～ 103 頁。

40）『生野義挙と其同志』257 頁。

41）同上，257 頁。北垣は議論の雰囲気を次のようにいう。「どうも其時分の此同志の勢といふものは，なかなか盛なもので，死ぬるといふより外には何も考へない。唯死にさへすれば宜いといふ覚悟でありますから，本多の言ふことなどは聴かない。」「段々評議をしますと腹を切るといふ問題と退去するといふ問題と，この二つでその他には何もない」（北垣「但馬一挙の真相」103 ～ 105 頁）。

42）同上，257 ～ 258 頁。

43）『尊王実記』46 葉。

44）同上，53 ～ 54 葉。

45）同上，54 葉。

46）同上。

47）『生野義挙と其同志』272 ～ 273 頁。

48）このことを佐藤文太郎氏は「（北垣晋太郎は）議衆くらいに名を連ねても良いはずだのに，陣容の中に名が見えません。本田素行の名も見えぬ事から考えて，二人には，何か特別の任務か配慮かがあったのかもしれません」という。（佐藤文太郎「生野義挙と南八郎」『銀山昔日』26 頁，生野町教育委員会）。

49）『兵庫県史　史料編　幕末維新Ⅰ』227 頁。なお，年貢半減は，文久 3 年 8 月の大和天誅組

の変でも出ているし，時代が下って戊辰戦争時（慶応 4 年）の西園寺公望山陰道鎮撫総督の「檄文」（1 月 4 日）の中にも，1 月 15 日の宿場町高宮の本陣前に相楽総三ひきいる「官軍先鋒嚮導隊」（赤報隊）の高札の中にも出てくる。ただし，天誅組の変でも生野の変でもほとんど影響力が無いように見えるし，戊辰戦争時にもどの程度影響力があったかは疑問である。

50）前嶋雅光『幕末生野義挙の研究』42 頁。

51）同上　49 ～ 50 頁。

52）同上　52 頁。

53）『嗚呼榧の木さん國道さん』66 頁。

54）『生野義挙と其同志』302 ～ 303 頁。なお，この妙見山とは，岩州山のことで，頂上に妙見堂の小さな祠があるのであるので，通称妙見堂と呼ばれている（太田虎一『生野義挙日記』72 頁）。

55）「銀山新話」『生野義挙と其同志』305 ～ 306 頁。

56）『生野義挙と其同志』306 頁。

57）「藤本義芳日記」『生野義挙と其同志』317 頁。

58）『生野義挙と其同志』325 ～ 326 頁。この沢の動きについて，沢の孫にあたる『生野義挙と其同志』の著者が割合評価をひかえているのに対して，春山育次郎『平野國臣傳』は沢の動きに対する批判を率直に出している。たとえば次のようにいう。「元来今度の義挙の覚束ないことは，播州の飾磨に着いた当時より，全く知れ切ってゐたのを，沢卿が飽くまでも成敗は問はぬ，唯斃れて後の志を継いで興るものを待つのみだと言はれるので，河上戸原等の硬論も行われまして，こゝまで来て事を挙げたのです。然るに元帥（沢―高久）はやくも出し抜いて落ち失せられては，衆は如何とも致方はありませぬ。人々今は死に場所もないと云ふ事情になりました。」（575 頁）。

59）「但馬義挙実記」『維新日乗纂輯　二』293 頁。

60）『生野義挙と其同志』336 頁。

61）「藤本義芳雑記」『生野義挙と其同志』335 頁。

62）「但州見聞録」「南八先生」「勤王三十二烈士伝」（『生野義挙と其同志』338 ～ 342 頁）。

63）『生野義挙と其同志』392 ～ 397，419 ～ 429，439 ～ 444，446 ～ 457，482 ～ 490 頁。

64）兵庫県史編集専門委員会編『兵庫県史　史料編　幕末維新 1』（1998 年）274 ～ 276 頁。なお，「但馬義挙実記」は，日本史籍協会編『維新日乗纂輯　二』（東京大学出版会，1925 年）にも収録されている。ただし，これには「惜ラクハ木曽源太郎（旭建）ノ加筆アリテ多少原書ノ故態ヲ損スルアリ」（『維新日乗纂輯　二』3 頁）とあるほか傍線部分の解説は記載がない。また傍線部分「翌十一日未明円応寺」の部分は「翌十二日未明円応寺」になっている。状況を考えると，これは「翌十一日未明円（延）応寺」が正しい。

65）『尊王実記』46 葉。

66）10 月 10 日の夜から 13 日の間「但馬一挙の真相」では北垣は　自分の行動を語っていない。たとえば「十日の夜生野に行きまして，さうして生野の代官所を借受けて此処に這入つて

諸方に号令を下したのです。其号令は一面は農民を募集する，それから又使者を近藩に派遣して其趣意とする所は，三条前の中納言以下諸卿及長門宰相父子の冤を訴願せん為め上京の途次なり，家臣をして京都を事情を窺はしめ暫く此処を留り其報を待つのみ，斯ういふことを諸藩に告げたのであります。それが十日の夜でありますが，十三日に至って近国の諸藩が南北から襲来するといふことになつて来たのです」とのみ語っている（27～28頁）。

67）『山東町誌』上巻，1241頁。

68）小山六郎「山陰義挙実記」『山東町誌』上巻，1246頁。

69）『尊王実記』53葉。

70）『生野義挙と其同志』324頁。

71）「北垣國道伝」『生野義挙と其同志』431～432頁。

72）『嗚呼榧の木さん國道さん』83頁。

73）『原六郎翁伝』上，103～105頁。

74）同上，上，106頁。

75）同上，上，111～113頁。

76）同上，上，113～115頁。

77）同上，上，115～119頁。備前の児島時代，原は次のように書く。「金もなくなり，食に困つて居ると恰度海浜で地引を曳いて居つた。夫れに加勢して魚を貰ひ，煮て食つて飢えを凌いだ。」（119頁）。

78）同上，上，120～123頁。

79）西村哲二郎の自刃の原因については，『生野義挙と其同志』471頁，『原六郎翁伝』上，124～125頁，拙稿「北垣国道と鳥取人脈」でも触れている。。

80）『北垣国道日記「塵海」』595頁。

81）森大狂『近世名匠談』春陽堂，124～125頁，1900年3月，国立国会図書館デジタルコレクション。なお，森寛斎は，1894年（明治27）6月2日，京都の自宅で享年81歳で死去するが，その年の『日出新聞』は，6月6日から6月13日まで4回にわたって「寛斎翁の逸事」を発表する。この（二）に北垣と接触の事例がある。北垣が幕府の間諜と奇兵隊に疑われ，処刑されんとした時，森寛斎が疑いを晴らすという事実は同じである。ただし，傍線の個所は新聞記事にはない。

82）「森寛斎略伝」（京都府立総合資料館編『京都府百年の資料　八　美術工芸編』京都府，1972年）192～195頁。

83）「森寛斎日記」（京都府立総合資料館編『京都府百年の資料　八　美術工芸編』京都府，1972年）39，44，51－52，54，58，59，60，62，63，80，81，82，87，93，100，101，112，119，120，124，128，130，135，137，148，149，160，161，166，168，175，178頁。

84）『京都府百年の年表　八　美術工芸編』63頁。

85）同上，93頁。

86）同上，101頁。

87）同上，87 頁。
88）『日出新聞』明治 21 年 6 月 5 日，6 月 9 日付。
89）塵海研究会編『北垣国道日記「塵海」』思文閣出版，2010 年，430 頁。
90）『生野義挙と其同志』392 ～ 399 頁，太田虎一『生野義挙日記』84 ～ 85，114 頁。
91）『生野義挙日記』37 ～ 38，59 ～ 60 頁。
92）『生野義挙と其同志』11 頁。
93）母リキが 1886 年（明治 19）4 月 22 日死亡した時，北垣の悲しみの表現は「塵海」に詳しい（『北垣国道日記「塵海」』170 ～ 173 頁）。
94）『嗚呼榧の木さん國道さん』98 頁。
95）同上。
96）『生野義挙日記』37，68 ～ 69，113 頁。
97）同上，22，83 頁。『平野國臣伝記及遺稿』210 頁。
98）『生野義挙日記』27，105 頁。
99）『嗚呼榧の木さん國道さん』98 頁。
100）ただし，奇兵隊には白石廉作のような豪商白石正一郎の弟で平野国臣とも面識のある人物もいた。平野は安政 6 年（1859）2 月より翌年の 8 月まで長州竹崎の白石正一郎家にいた。「白石正一郎の兄弟が（この間の―高久）國臣の庇護者」と春山育次郎『平野國臣傳』はいう（340 頁）。ただし，奇兵隊自身が「内実は恐怖政治のような面」（青山忠正『明治維新史という冒険』思文閣出版，182 頁）があり，その点では他の組織以上に行動の一致原則が要請された。
101）『生野義挙と其同志』316 頁。
102）「藤本義芳雑記」『生野義挙と其同志』316 ～ 317 頁。
103）「但馬一挙の真相」31 頁。